

各関係機関団体の長 } 殿  
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

令和 7 年度病虫害発生予報第 5 号 (8 月) について

このことについて、病虫害発生予報第 5 号を発表したので送付します。

予報第 5 号

ハダニ類の発生状況を確認しましょう

本年は、梅雨明けが 6 月 27 日頃とかなり早くなったため、7 月 1 日から 28 日までの降水量が  
平年の 22 % (大宰府アメダス) と、極端に少なくなっています。

これに伴い、各作物でハダニ類が目立ち始めたほ場が多くなっています。

ハダニ類は増殖が速いので、発生を確認したら直ちに対策を取りましょう。また、高温となる  
日中の防除は葉害の恐れがありますので、涼しい時間帯に行いましょう。



図 1 カンキツ葉上のミカンハダニ



図 2 チャ葉上のカンザワハダニのコロニー

8月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	8月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲 (普通期)	いもち病	並	やや少	並
	紋枯病	—	—	並
	セジロウンカ	少	少	少
	トビイロウンカ	やや少	やや少	並
	コブノメイガ	やや少	やや少	少
	斑点米カメムシ類	多	多	多
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや多	やや多
かんきつ	黒点病	やや少	やや少	やや少
	ミカンハダニ	並	並	並
なし	ハダニ類	並	並	並
	ナシヒメシンクイ	並	並	並
かき	炭疽病	やや多	やや多	やや多
	フジコナカイガラムシ	少	少	並
	ハマキムシ類	やや多	やや多	やや多
	カキノヘタムシガ	並	並	並
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ他)	少 <sup>3)</sup>	— <sup>3)</sup>	少 <sup>3)</sup>
イチゴ (育苗期)	炭疽病	並	並	やや多
	ハダニ類	並	並	並
野菜共通	コナジラミ類	やや多	やや多 <sup>4)</sup>	やや多 <sup>4)</sup>
茶	炭疽病	並	並	少
	カンザワハダニ	やや多	やや多	やや多
	チャノコカクモンハマキ	並	並	並
	チャノホソガ	やや多	やや多	やや多
	チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少	やや少
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	並
	チャトゲコナジラミ	やや少	並	並

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。  
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は年次間変動が大きいので、前年比としています。

注4) 野菜共通・コナジラミ類は、2018年から調査を実施しているため、平年は過去7年間としています。

<予想される向こう1か月の天候（令和7年7月26日～8月25日）>

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並30 高60% 平年より高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み

（福岡管区気象台 令和7年7月24日発表1か月予報より抜粋）

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html> または右QRコード①

①⇒



○X（旧Twitter）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

Xの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス  
URL: [https://x.com/PPDPO\\_Fukuoka](https://x.com/PPDPO_Fukuoka) または右QRコード②

②⇒



【普通作物：水稲】

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

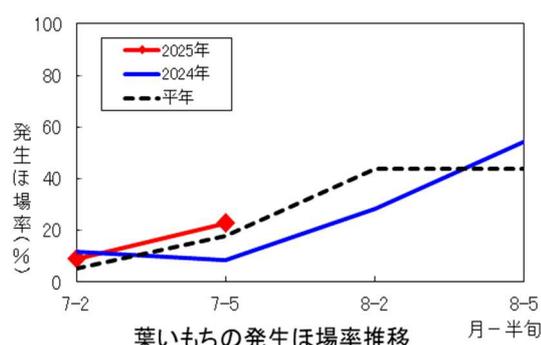
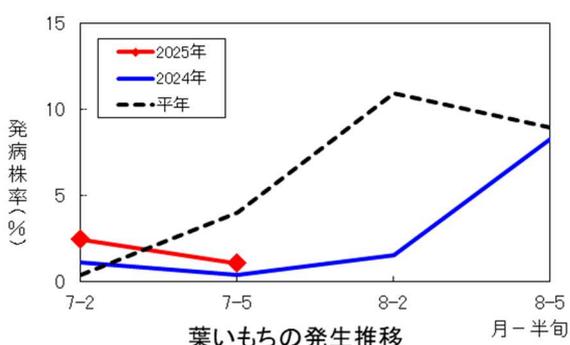
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 1.1%（平年 4.0%、前年 0.4%）

発生ほ場率 22.9%（平年 18.0%、前年 8.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況は地域・品種・ほ場等で大きく異なるため、必ずほ場の状況を確認する。

イ 本病は、病斑が少なくても大量の胞子を飛散するので、発生ほ場では穂いもち抑制のため薬剤防除を徹底する。また、多発ほ場では穂肥を控える。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除は、出穂前の予防散布を基本とする。

エ 薬剤感受性低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 農薬の使用および散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

## 2 紋枯病

### (1) 予報の内容

発生量：前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は前年並であった。

発病株率 0.05% (前年 0.04%)

発生ほ場率 4.2% (前年 2.2%)

※2024年度から7月5半旬調査を開始したため、平年値はない。

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている(±)。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 密植や多肥栽培ほ場、昨年多発した場などでは発病しやすい傾向があるため、発病が認められたら早めに防除を行う。

イ 出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は補正防除を行う。

## 3 セジロウンカ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

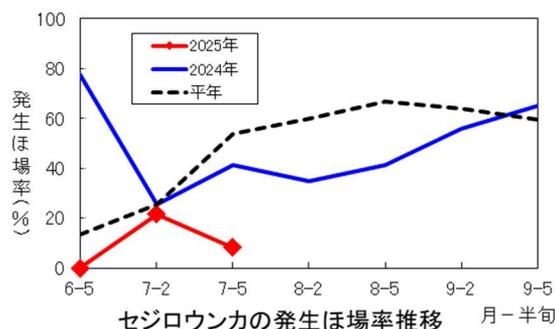
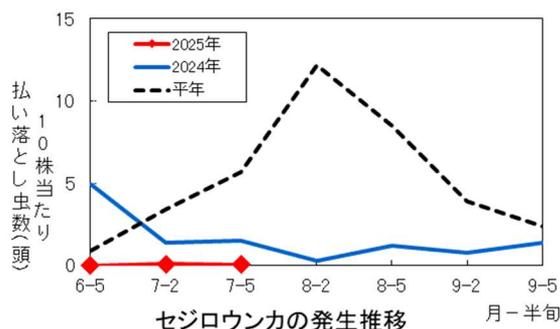
### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(ー)。

10株当たり払い落とし成幼虫数 0.1頭 (平年 5.7頭、前年 1.5頭)

発生ほ場率 8.3% (平年 53.8%、前年 41.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている(±)。



### (3) 防除上注意すべき事項

ア 使用した育苗箱施薬剤の種類によって発生量に差を生じる可能性があるため、ほ場における発生状況を確認する。

イ 幼穂形成期～穂揃期に吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少などの被害が生じるため、幼虫の発生が多い場合は薬剤防除を実施する。

## 4 トビイロウンカ

### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー～±)。

10株当たり払い落とし成幼虫数 0頭 (平年 0.8頭、前年 0.01頭)

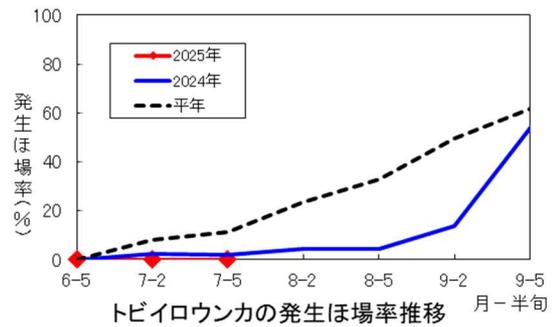
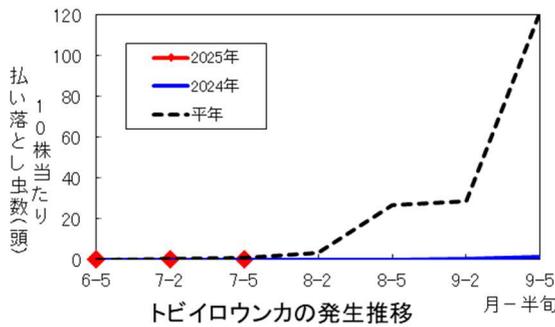
発生ほ場率 0% (平年 11.3%、前年 2.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている(±)。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 地域や移植時期により、飛来時期・飛来量は異なる。また、使用した育苗箱施薬剤の種類によって発生量に差を生じる可能性があるため、必ずほ場における発生状況を確認する。なお、移植後1か月以上経過した場合、育苗箱施薬剤が施用された水稻でも増殖しやすい。

- イ 本種は8月以降急激に増加する。防除適期は若齢幼虫期で、病虫害防除所ホームページ (<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#suitou>) の発生予測パターン図を参考に薬剤防除を行う。
- ウ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤は株元に十分かかるよう丁寧に散布する。
- エ 無人航空機による防除を気温が高い時間帯に実施すると、水稻の株元に到達する前に気化し、防除効果が低下する場合がありますので、できる限り気温が上昇する前の早朝に実施する。



**※福岡県の要防除水準 (中老齢幼虫合計値で示す)**

飛来後第1世代 : 100株当たり	20頭以上
飛来後第2世代 : 100株当たり	100頭以上

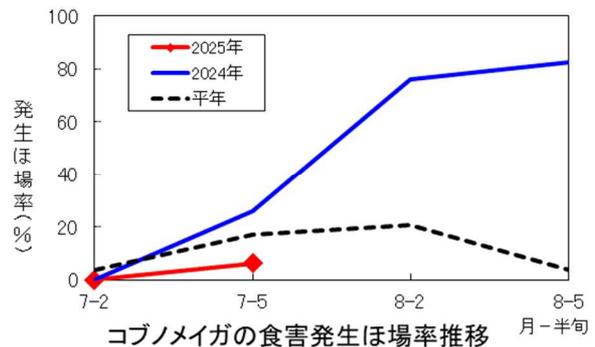
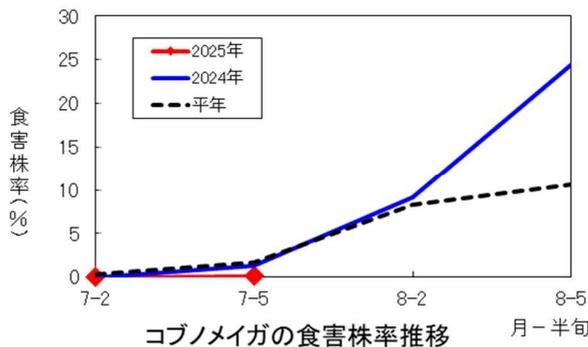
## 5 コブノメイガ

### (1) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや少、前年より少

### (2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(一~±)。  
食害株率 0.1% (平年 1.7%、前年 1.3%)  
食害株発生ほ場率 6.4% (平年 17.1%、前年 26.1%)  
30㎡当たり払出し成虫数 0.2頭 (平年 0.2頭、前年 0.2頭)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期は発蛾最盛期から1週間後である。
- イ ほ場での発生が多い場合は、発生状況や病虫害防除所ホームページ (<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#suitou>) の発生予想パターン図を参考に薬剤散布を行う。
- ウ 一部の箱施薬剤で薬剤感受性の低下が確認されており、使用薬剤の種類によって害虫の発生量に差が生じる可能性があるため、必ずほ場における発生状況を確認する。

## 5 斑点米カメムシ類

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

### (2) 予報の根拠

ア 県内5か所\*1の予察灯における5月1半旬～7月4半旬までの誘殺数は、平年より多かった(+)。

主要3種カメムシ(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ) 47頭(平年 15.3頭、前年 16頭)

ミナミアオカメムシ 447頭(平年 220.2頭、前年 311頭)

アカスジカスミカメ 634頭(平年 467.1頭、前年 522頭)

イネカメムシ 986頭(平年 144.0頭、前年 519頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

### (3) 防除上注意すべき事項

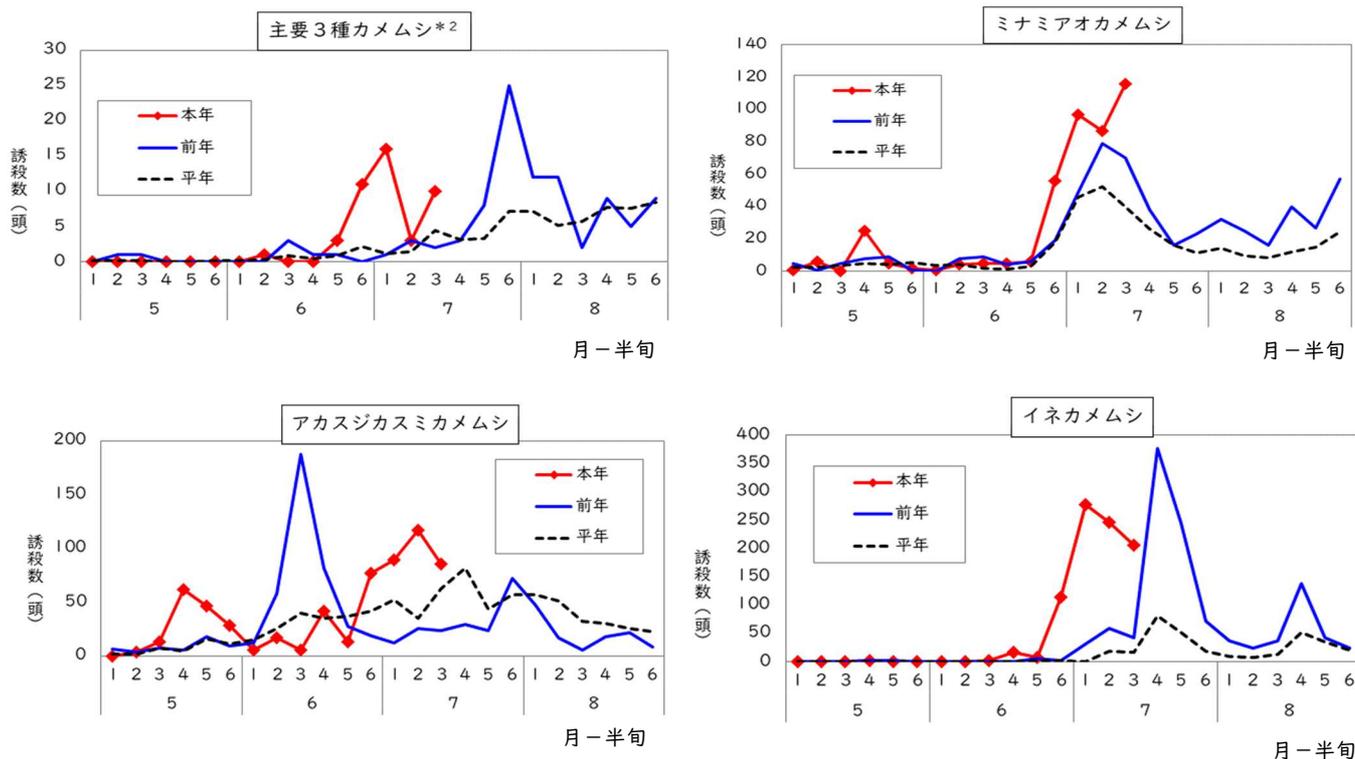
ア 防除は、穂揃い期とその7～10日後の2回防除が基本であるが、その後も発生が見られる場合は、追加防除を行う。

イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

ウ 斑点米カメムシ類の飛来・増殖源である畦畔・休耕田の草刈りを出穂2週間前までに実施する。なお、出穂後の草刈りは、本虫のほ場内への侵入を助長するので避ける。

エ イネカメムシは、出穂直後から本田へ飛来して吸汁加害するため、防除適期は出穂期とその7～14日後で、他の斑点米カメムシ類の防除適期と異なるので注意する。また、周囲より出穂が早いほ場では、出穂期に集中的に加害を受けると不稔穂が発生し、収量に影響するため特に注意する。

※令和7年7月22日付注意報第1号(斑点米カメムシ類)を参照



\*1 県内5か所 筑紫野市、糸島市、遠賀町、みやま市、荻田町 (みやま市、荻田町は本年より移転)

\*2 主要3種カメムシは、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシの合計頭数

予察灯における斑点米カメムシ類の誘殺数の推移

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月1～5半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、地域差はあるものの平年並であった(±)。

筑紫野市 378 頭 (平年 421.9 頭、前年 73 頭)

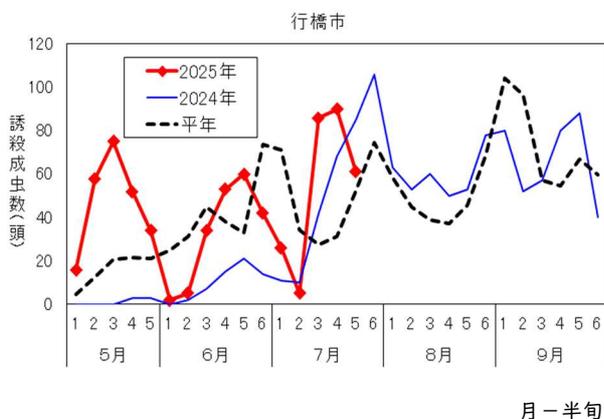
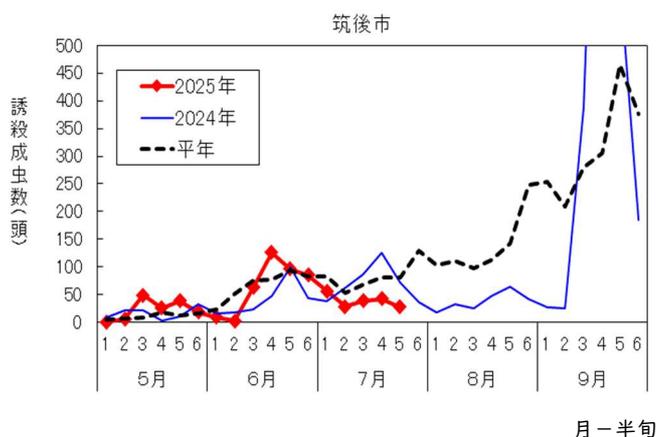
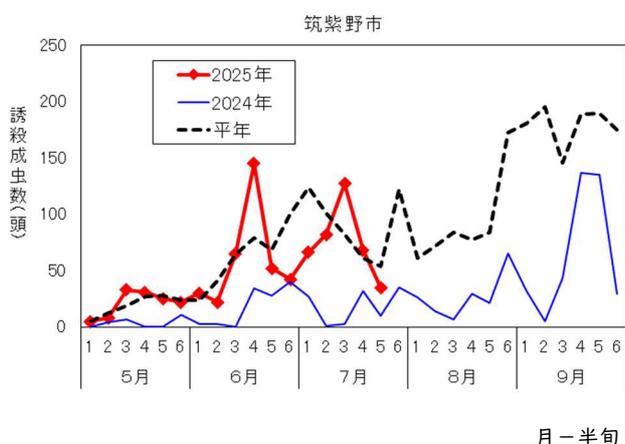
筑後市 192 頭 (平年 365.0 頭、前年 384 頭)

行橋市 268 頭 (平年 216.8 頭、前年 216 頭)

イ 7月5半旬調査において、ほ場で白変葉の発生を確認した(+)。

発生ほ場率 33.3%

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺数の推移

(3) 防除上注意すべき事項

ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去するとともに、白変葉の発生が多い場合は、防除を行う。

イ フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから10日頃であるが、地域によって誘殺消長に差があるため、ほ場のハスモンヨトウや白変葉の発生状況を観察して防除の時期や要否を決定する。

ウ 食害による減収量が大きいのは開花後7～20日頃(8月下旬～9月上旬)であるので、この時期に白変葉が多い場合は直ちに防除を行う。

エ 一部の薬剤で、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。

## 【果樹：かんきつ】

### 1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病果率 0%（平年 0.30%、前年 0.15%）

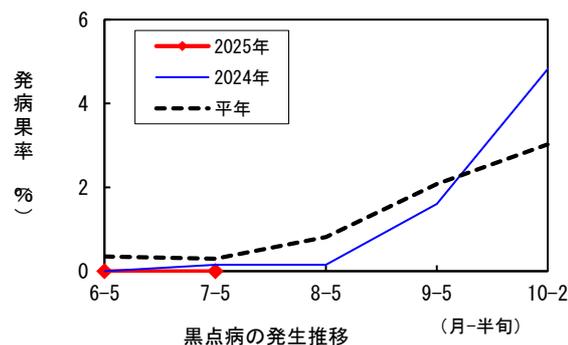
発病ほ場率 0%（平年 31.2%、前年 18.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 前回防除後の積算降水量や散布間隔に応じた適期防除を行う。



### 2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

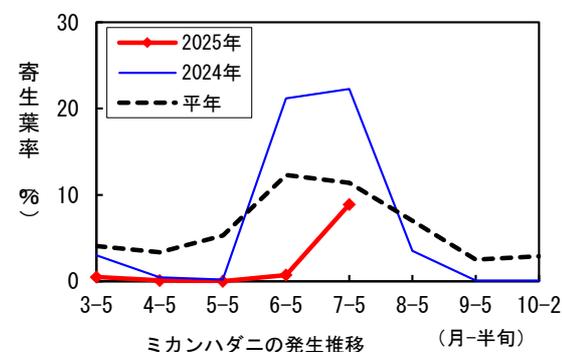
寄生葉率 8.9%（平年 11.4%、前年 22.3%）

発生ほ場率 45.5%（平年 52.1%、前年 45.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【果樹：なし】

### 1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

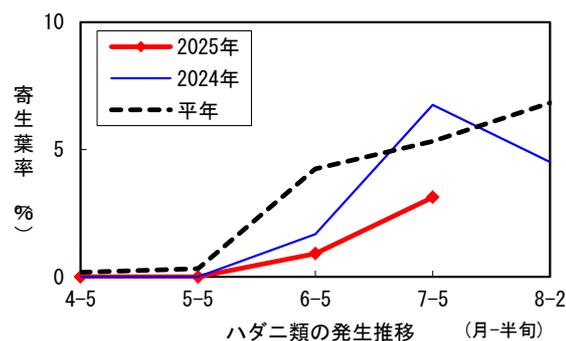
寄生葉率 3.1%（平年 5.3%、前年 6.8%）

発生ほ場率 66.7%（平年 41.3%、前年 41.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に防除を徹底する。また、薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。



## 2 ナシヒメシンクイ

### (1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害果率 0.08% (平年 0.14%、前年 0.17%)

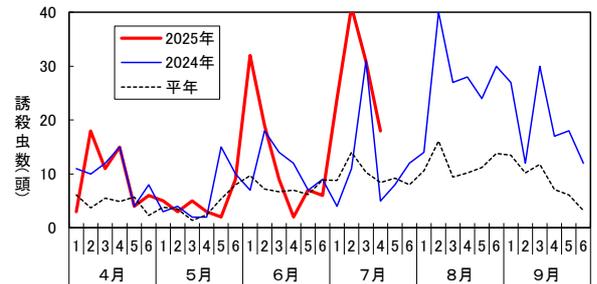
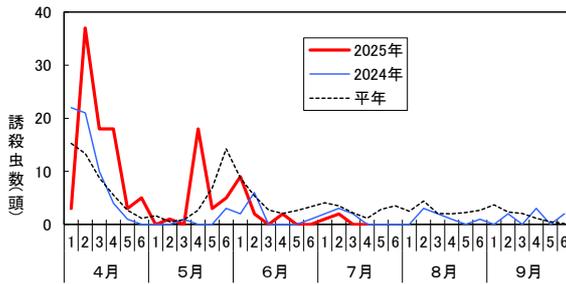
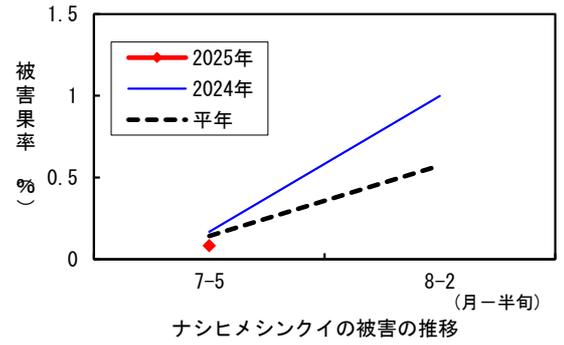
発生ほ場率 16.7% (平年 17.6%、前年 33.3%)

イ 第2～3世代と考えられる6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップにおける雄成虫誘殺数は、朝倉市でやや少なく、八女市でやや多かった。

<朝倉市> 16頭 (平年 36頭、前年 16頭)

<八女市> 189頭 (平年 87頭、前年 118頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



### (3) 防除上注意すべき事項

ア 8月以降の第4世代発蛾最盛期直後の若齢幼虫期を目安に防除を行う。

また、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除に当っては果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

## 【果樹：かき】

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

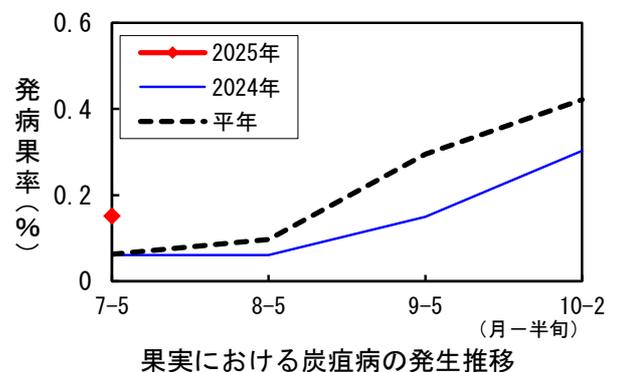
発病果率 0.15% (平年 0.06%、前年 0.06%)

発病果ほ場率 18.2% (平年 10.1%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



## 2 フジコナカイガラムシ

### (1) 予報の内容

発生量： 平年より少、前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

寄生果率 0.2%（平年 3.7%、前年 0.7%）

発生ほ場率45.5%（平年 71.6%、前年 45.5%）

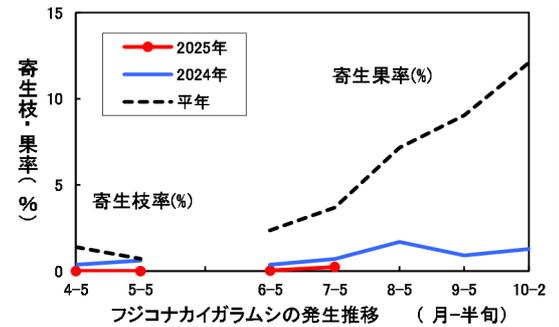
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、天敵への影響が比較的少ない薬剤を選択する。

イ 果樹カメムシ類の防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

ウ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



## 3 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）

### (1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

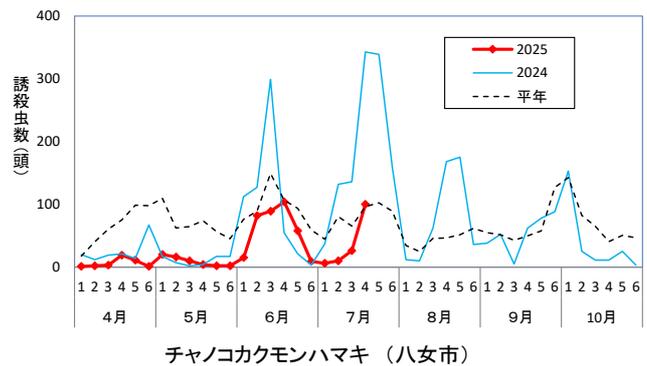
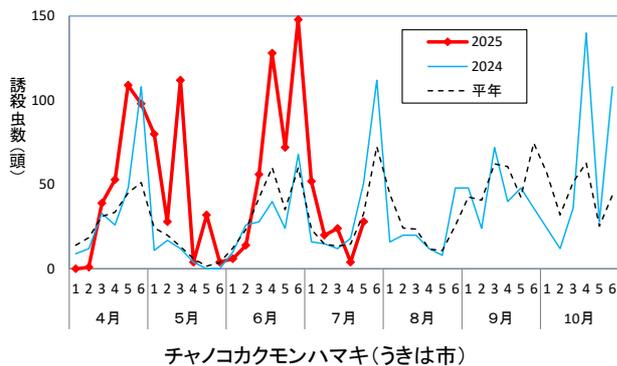
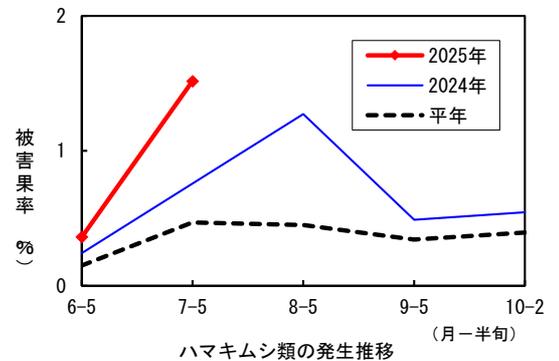
ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

被害果率1.5%（平年 0.5%、前年 0.8%）

発生ほ場率81.8%（平年 43.5%、前年 72.7%）

イ 第1～2世代と考えられる6月1半月～7月5半月のフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、下記のとおり地域差が大きい。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ	<うきは市>	524頭	（平年 327頭、前年 299頭）
	<八女市>	1,764頭	（平年 861頭、前年 1,265頭）
：チャハマキ	<うきは市>	1頭	（平年 7頭、前年 6頭）
	<八女市>	0頭	（※平年 54頭、前年 16頭）



※八女市のフェロモントラップ設置箇所が2024年度から、6km程離れた場所に変更されたため、平年値との比較については参考値となる。

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア ハマキムシ類は世代数が多く発生期間が長いので、各態の虫が混発している。発生が多い園では成虫の発生時期と量に注意し、発蛾最盛期7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を徹底する。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよ

う十分量の薬量を丁寧に散布する。

#### 4 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生果率 0.03% (平年 0.06%、前年 0.06%)

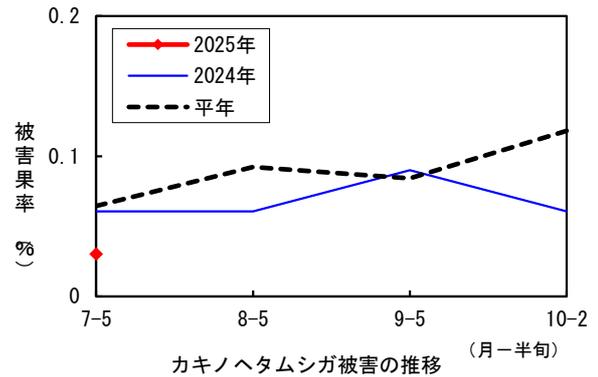
発生ほ場率 9.1% (平年 7.7%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上～中旬の第1世代成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の10日後頃の防除を実施する。

イ 孵化後の幼虫は果梗部やヘタの部分から果実に食入するため、散布むらがないよう丁寧に散布する。



#### 【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ他）】

(1) 予報の内容

発生量：前年より少

発生時期：ヒノキ球果口針鞘数からの予察では、9月中旬以降の飛来が予測される。

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、なし及びかきでの被害果は平年より少なかった(ー)。

なし 被害果率 0.1% (平年0.4% 前年 0.7%)

発生ほ場率 16.7% (平年30.0% 前年 83.3%)

かき 被害果率 0.03% (平年0.40% 前年 0.24%)

発生ほ場率 9.1% (平年26.7% 前年 45.5%)

イ 4月1半旬～7月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は、前年・前々年より少なかった(ー)。

誘殺数 <筑紫野市> 406頭 (前年 9,904頭、前々年 762頭)

ウ 7月5半旬のヒノキ球果ビーティングによる成幼虫捕獲虫数は平年・前年よりやや少なかった(ー～±)。

捕獲虫数 0.9頭 (平年 6.8頭、前年 4.4頭)

エ 7月5半旬の14地点のヒノキ1球果当たりの平均口針鞘数と、離脱時期予測は下記のとおり。

県下平均：0.6本/果 ⇒ 離脱時期予測は9月12日頃

朝倉地域：0.02本/果 ⇒ 離脱時期予測は9月15日頃

久留米地域：0.2本/果 ⇒ 離脱時期予測は9月13日頃

筑後地域：2.0本/果 ⇒ 離脱時期予測は9月8日頃

県北地域：0.3本/果 ⇒ 離脱時期予測は9月11日頃

※詳細は、令和7年7月31日付技術情報第5号（果樹カメムシ類）を参照。

オ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹園への飛来時期は地域により異なる。また、同一園内でも被害発生状況には偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ この予測は7月5半旬時点でのデータに基づくものであり、今後の発生状況については病虫害防除所ホームページを参照する。

## 【野菜：イチゴ（育苗期）】

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 0.03% (平年 0.06%、前年 0.13%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年多発したほ場では、特に下記の項目を遵守し、防除を徹底する。

イ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがある。ほ場内での発生状況に注意し、発病株や周辺株を速やかに持ち出し処分する。

ウ 育苗床の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空け通風を図る。

エ 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な肥培管理に努める。

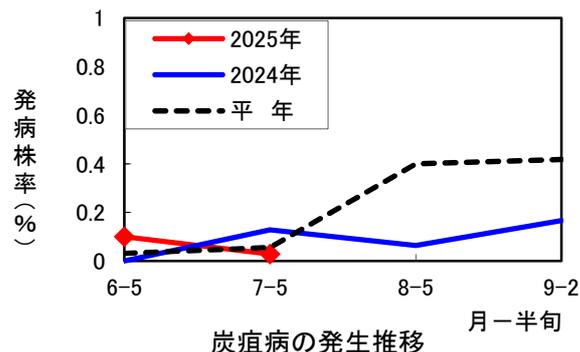
オ 発病後に治療できる薬剤はないことから、感染を防ぐため、葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を行う。

カ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

キ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に生育状況を確認し、健全苗を選抜する。

ク 入庫前や陽光処理時のかん水は過度にならないように注意する。

ケ 入庫する際は、加湿を避けるために苗を詰めすぎないように注意する。



### 2 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

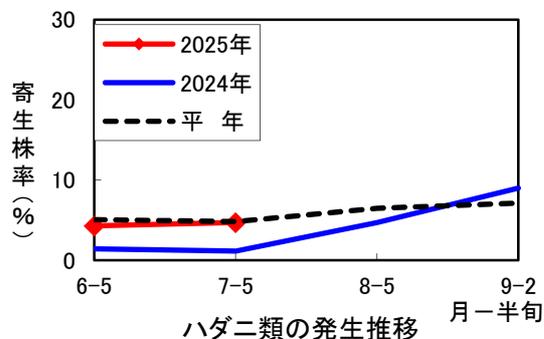
発生量：平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 4.71% (平年 4.8%、前年 1.14%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



#### (3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 多発後は防除が困難になるので、初発段階での防除に努める。

ウ 寄生株は葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。

エ 薬剤感受性が低下しやすいため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心掛ける。防除は摘葉後に行うと効果的である。

カ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に必ず防除を行い、本ほ場にハダニ類を持ち込まないようにする。

キ 土着天敵を活用する場合は、天敵への影響が小さい薬剤を使用する。

<県ホームページ掲載の「令和7年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>

[https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/749464\\_62334252\\_misc.pdf](https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/749464_62334252_misc.pdf)

## 【野菜共通：コナジラミ類】

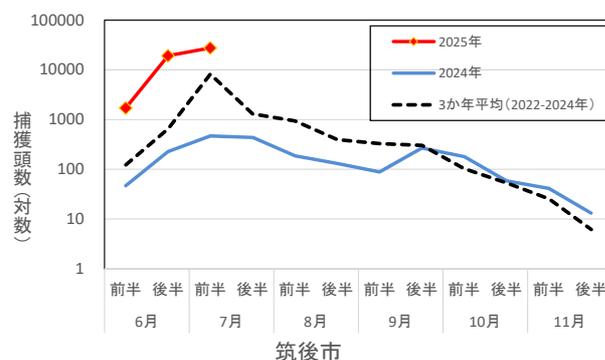
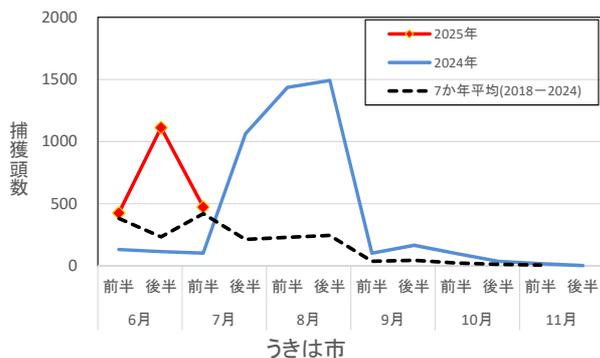
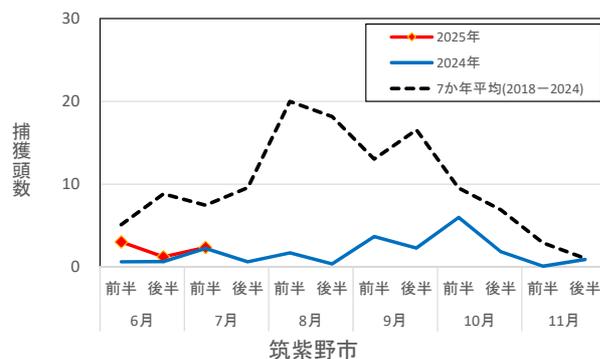
### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 7月の粘着板トラップにおける捕獲虫数は2か所で平年（前年）よりやや多かった（±～+）。

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



### (3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

ウ 黄色粘着板等の設置により発生状況を確認し、初発段階での防除に努める。

エ 苗による持ち込みを防ぐため、育苗時から防除を行い、本ぼへの持ち込みを防ぐ。

オ 栽培終了時はハウスを密閉して蒸しこみ（約50℃で7～10日間程度）を行い、ハウス外への分散を防ぐ。

カ 「入れない、出さない、増やさない」対策を徹底する。

## 【茶】

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

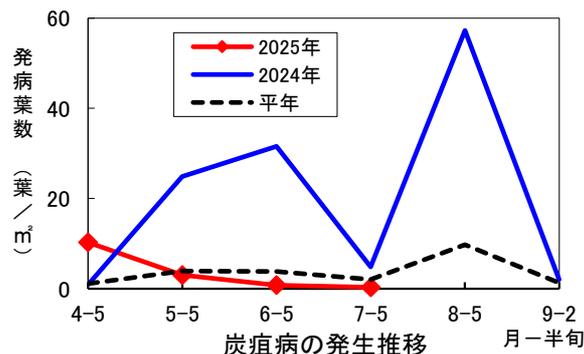
#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年並であった。（±）。

発病葉数 0.3葉（平年 2.0葉、前年 4.8葉）

発病ほ場率 40.0%（平年 54.1%、前年 88.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴により孢子が飛散伝搬するため、防除は降雨前日までに実施する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、秋芽萌芽期の防除を徹底する。

また、9月頃まで発生が増加するので、防除は降雨前日までに実施する。

### 2 カンザワハダニ

#### (1) 予報の内容

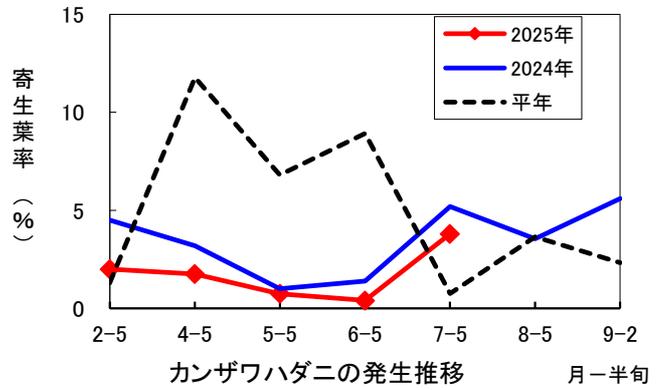
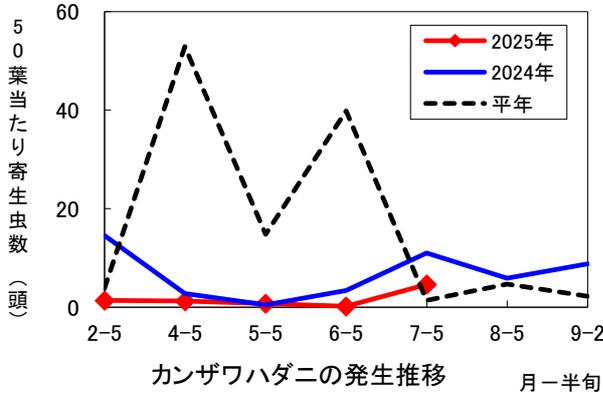
発生量：平年・前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

50葉当たり虫数 4.6頭（平年 1.4頭、前年 11.0頭）  
 寄生葉率 3.8%（平年 0.8%、前年 5.2%）  
 発生ほ場率 60%（平年 10.1%、前年 60%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発している園では、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- イ 同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

1㎡当たり葉巻数 0.20葉（平年 0.24葉、前年 0.47葉）

発生ほ場率 30.0%（平年 26.6%、前年 50.0%）

イ 4月1半旬～7月5半旬までのフェロモントラ

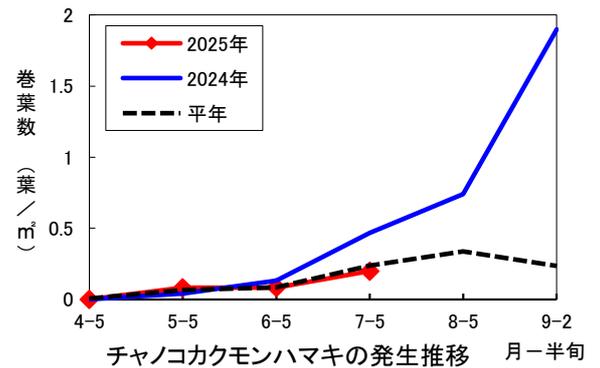
ップによる雄成虫誘殺虫数は、うきは市ではやや多く、八女市ではやや少なかった（±）。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 1,084頭（平年 562頭、前年 537頭）

<八女市> 590頭（平年 1,663頭、前年 1,482頭）

※グラフは【果樹：かき】のチャノコカクモンハマキの項参照

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7～10日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。  
1㎡当たり葉巻数 0.13 葉（平年 0.05 葉、前年 0 葉）

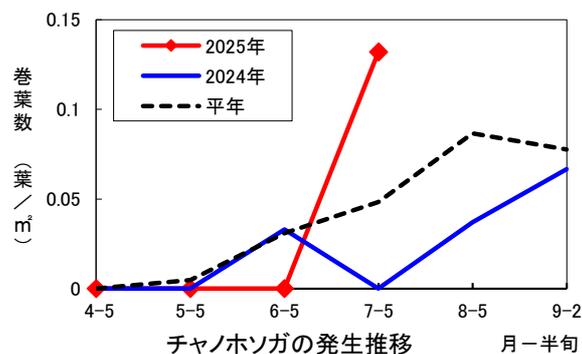
発生ほ場率 30.0%（平年 31.4 %、前年 0 %）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7～10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。



## 5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった。（-～±）。

たたき落とし虫数 0.18 頭（平年 1.67 頭、前年 1.28 頭）

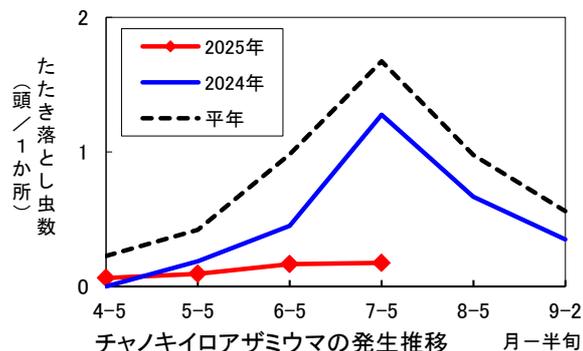
発生ほ場率 40.0 %（平年 70.6%、前年 80.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア B 5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



## 6 チャノミドリヒメコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

たたき落とし虫数 0.50 頭（平年 0.65 頭、前年 0.18 頭）

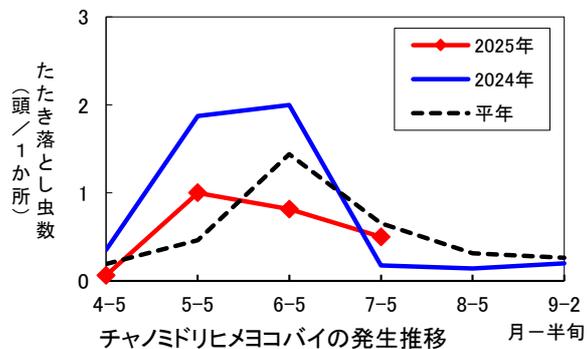
発生ほ場率 70.0 %（平年 56.8 %、前年 20.0 %）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 二番茶期から秋にかけて発生が多くなるため、成幼虫の発生状況に注意し、B 5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する



## 7 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

寄生葉率 1.2 % ( 平年 8.8 %、前年 6.4 %)

発生ほ場率 40.0 % ( 平年 52.1 %、前年 60.0 %)

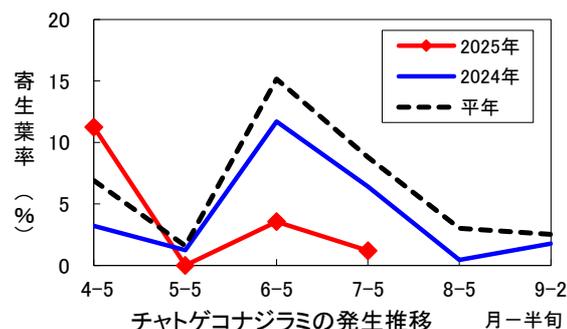
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は成虫発生後の若齢幼虫発生期である。

成虫が最も多い時から14日後を目安に防除を行う。

イ 幼虫は葉裏に発生しているため、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



## 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。使用者の安全はもちろん、周囲の人畜・隣接作物・河川等への配慮についてもご指導をお願いします。

### 1 農薬適正使用の徹底

- 適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。
- ※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

- 有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

### 2 飛散防止対策の徹底

- 風の弱い時に散布する。
- 風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。
- 飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。
- 散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。
- 農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

### 3 保護具の着用

- 農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

### 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

- 噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

### 5 防除履歴の記帳

- 農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

### 6 空容器の処分

- 空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律(廃掃法)』で禁止されているので、絶対に行わない。